アイルランドとヨットの恋人
――アドルノ、ニーチェ、そして岡本太郎

山下　航佑

[Essay]
YAMASHITA, Kosuke
Ireland and My steady of yacht:
Adorno, Nietzche and Taro Okamoto

アイルランドに来て二ヶ月がたとうとしている。海外に渡ったのは、これから自分はどう生きていくのか、一度まったくこれまでの環境から自分を引き離して、考えてみたいと思ったからだった。実際、僕は環境の変化にすがらなければならないほど、追い詰められ弱っていた。大学に入って七年の間、いつも楽しく気ままに生活する一方で、このままでは本当に自分はダメになってしまうのではないかという恐怖に、ずっととりつかれていた。自律すべき毎日の生活、恋人、学問、将来、そして全てにおいて自分自身。はじめてまともに人生にぶつかった。僕にはそのどれもが恐ろしく苦しかった。三重から京都に移って、海がなくなったこともかなり堪えた。僕は海が好きでしかたがない。

僕にはずっと、明るく純粋に生きていこうという信念があった。唯一つその決意が、自分を勇気づけ、恋人を喜ばせていた。それだけが本当に救いであり、同時に絶望と孤独であった。なぜなら、その唯一の拠りどころはいつも、毎朝、毎晩、無残に敗れたから。当然のことだが、生きていれば毎日が、まったく新しい可能性であり、その可能性にかければかけるほど徹底的な不可能だ。アドルノから学んだ批判理論と岡本太郎から学んだ芸術、その美しい意志と笑いの哲学、そして毎日の生活、寝坊したり、楽しい食事、あるいは将来について考えることが、完全に結びついて自分のまえに、物凄い重みを持ってグっと現れた。世界は不当で、間違っている。これは決して陳腐な認識などではない。僕はアドルノとともに、絶対にこの認識を譲らないし、ここから目をそらすものを認めない。こんな世界は全体的に否定しなければならない、ほんのささいな幸福さえも無罪ではありえない。一方で、僕にも、他の人にも、譲りがたい美や喜びがあった。現実に頑としてある美と喜びが抗議している。無邪気な幸福をどうして否定しなければならないのか、それこそ暴力じゃないのか、と。この不幸な部分と全体の結びつき、両者はどうしても和解させられず、両方とも絶対に捨てることはできない。全体のために部分が否定されては決してならない、しかし同時に部分の美は、確実に、トータルに否定されるべき全体と分かちがたく結びつき補強してもいるのだ。アドルノが真摯に指摘したように、まさしく、全面的罪責連関。一切はこの外にはない。

この中で、明るく、ごまかさずに生きようとするとき、立ちはだかる条件は絶望的に巨大であり、自分一人で全世界を背負っているとい

う生々しい実感があった。ベンヤミンはどこかで言っていた。「間違った状況に正しく対応するのは、私には無理です」と。たしかにこの間違った世界で倫理は不可能だ。しかし僕はそれを目指さないわけにはいかない。つまり、この不可能の重みをほんのわずかも損なうことなく、常に自分に矛先を向けるのでなければ本当ではない。すべては、自分にかかっているのだから。ひとりで、全世界を背負って生きている、そうでなければならない。そういう態度で生きていかなければいけないと今でも信じている。決して屈服しない、そう自分に言い聞かせるとき、自分の中で、絶対に消してはならない命が小さく、しかし確かに燃えているのがわかった。この炎が、僕のはじめて知る神聖であり、純粋な命そのものだった。この炎を燃やし続けなければならない！

僕はいつも勇気をだして新しい気持ちで立ち向かっては失敗し、一人で立ちすくみ怖気づいていた。そしてこのやり直しと失敗の途方もない繰り返しに吐き気がした。そんなときは、たとえ恋人が手をさしのべてくれたとしても、一人ぼっちにならざるをえない。元気にやれているときは二人で喜び合えても、失敗のときはどうしても一人孤独だった。助けてくれようとするほど喧嘩になり、いつも意地悪く言い負かして、さらには上手く元気づけてくれない彼女を責めた。いつも明朗に！　それがお前の信念じゃないのか！　だいたい、自分の失敗を人のセイにするなんて！　そのうえ彼女に救いを期待するなんて恥ずかしくないのか……！　そう自分に言い聞かせ、なんとか立て直そうと思っても、どうしてもできなかった。もっとも優しい味方にさえ、この重みを伝えることはできない。それに乗じて彼女を攻撃したのだ。自分の卑怯さへの憎悪と絶望に、ますます孤独を感じ追い詰められた。

絶対に自分以外に期待してはならない――。恋人との生活は僕にとって、一面、この言葉と自分との戦いであり、見守ってくれたのは繊細で傷つきやすく、それだけに勇敢な、美しい女性であった。

僕は海が本当に好きだ。そして子供のころからヨットが大好きだった。迷わずヨット部に入った。ところが、いざ乗ってみるといつも酷い船酔いである。本当に恐ろしかった。一度船酔いが来るともう文字通りそこから逃れたい一身で、恐怖と拒絶感が全身を支配した。夏の合宿などは、ほとんど夏中琵琶湖に泊り込んで練習するのだが、毎日船に乗るのが憂鬱で仕方がない。朝起きると吐き気がした。しかし、それでも乗りたい、ここから逃げ出してはダメだと思った。僕は憧れと拒絶感の間で板ばさみになって苦しんだ。これには結局耐え切れず一年とたたずに辞めてしまったのだが、この時確かに、まぎれもなく運命が、恐ろしい、そして美しく惹きつける姿で、僕の前に立っていた。

恋人やヨット、朝寝坊、こういうどうしようもない、自分の限界にぶつかるとき、その重みは自分にしかわからない。いや、自分にしかわからないのでなければならない。何度挑戦してもダメなのだ。本当につらい。そうやって絶望的な繰り返しをやっていた時、因果律と呼ばれるものが僕に降りかかってきた。それは一つの甘く苦い夢であり、恐ろしい毒でもあった。僕はそれまで、岡本の意志の哲学に強く惹きつけられつつ、ひとつの疑問がどんどん大きくなっていた。どうしてもできない者はどうなるのか……。結局それは、成功したものだけが後から振り返ることのできる都合のいい物語ではないのか……。みんなそれぞれ、どうしようもない重みをなんとか引きずって生きている。一人の人間にとって、自分の限界に挑戦するというのは過酷で、ほとんど絶望的に不可能ですらある。これをたまたま上手くやった者が、勝者として持ち上げられるなんて許せないと思った。勝者だけに与えられる哲学なんて僕は受け入れない。そんなものを拠りどころにするなんて卑しいとすら思う。絶対に認めない、そのほうが正しいと思ったのだ。だから僕は、意志なるものを消そうと躍起になった。本当に

それは意志の問題なのか……。最初からそうなるべくしてなっただけではないのか……。これはヨットの経験からずっしりと引きずっていたものでもあった。無理なものは無理なんだ。そんな時にぶつかったのが、因果律なのである。恐ろしくシンプルで強力な考えだった。これによれば、全ては単なる物理現象の連鎖だ。意志だってその一部にすぎない。認めればなし崩しに全てを受け入れるしかなくなるのだが、自己責任を持った敗者なんかがいる卑劣な世界よりはマシに思えた。それになにより、抗いがたい説得力があった。ああ、これでもう自分を追い詰める必要はないんだな。そう思うと、ほっとした。僕の頭からはこの考えが離れなくなった。しかし、何もかも仕方ないこととして受け入れるのは空しかった。それは、アドルノを裏切ることでもあった。結局、単なる思い込みにすぎないとしても、決断しているように思える自分自身のほうへ、問題は投げ返されざるをえなかったのだ。でも、もう一度失敗する勇気がない。炎が膿んで消えかかっていた。

そう、僕はアイルランドにやってきた。ここで僕は、なんとかこの問題をもう一度、自分以外の全てから、恋人からも離れて、考え直してみなければいけないと思っていた。今思えば考える方向は決まっていた。僕は、勇気を持たなければならなかった。もう一度失敗する勇気を。もちろん成功すればもっといいが、そんなことは、今は関係がない。そこで出会ったのがニーチェであり、もう一度岡本太郎、そしてまぎれもなく自分自身であった。

ダブリン市街から歩いて一時間ほどいくとダブリンポートがある。ダブリンで僕の一番好きな場所だ。ある晴れた日、街に潮風が吹いて誘っているようだったので、海まで一人歩いて行って見つけたのだ。そこにはかなり広い浜があり、黒っぽい細かい砂に、潮の満ちひきでつくられた波模様が幾重にも重なって、不思議な光景をつくっている。遠浅な海らしく、浜の近くと遠くではかなり海の色が違う。こちら側は光を含んだ暖かいみどり、向こう側は巨大な、重く濃い青だ。そんな浜の端っこから、長い堤防が海に向かって突き出ている。浜から先端の赤い大きな灯台まで二キロ以上あるだろう。その堤防の中間に、夏は水泳用のクラブハウスとして使われているらしい、休憩場がある。白塗りのすっきりした建物に赤い扉と、青いベンチが気持ちよく目に映る。波はいたわるように、たっぷりと優しく光を溜めてくれていた。僕は気が向くとそこへ行って、出発前に仲間から贈ってもらった柄谷の『探究』、そしてニーチェの『ツァラトゥストラ』を読んだ。柄谷の他者論に対する反発と、ニーチェの勇気。この二つが絡み合い、相乗して、僕は一つのものをしっかりつかんだ。芸術を。

柄谷はほんとうの他者とは、言語ゲームを共有しない者のことだという。そのような他者に教える立場から全てを考え始めなければならいと。そこに他者への「命がけの飛躍」があるのだと。他者に向き合おうとする柄谷の姿勢には心から賛成するが、僕には柄谷の他者の定義は受け入れられない。僕にとって本当の他者は、これ以上ないほどよく言語ゲームを共有した恋人だったのだから。言語ゲームでは絶対に教えることができないものがある。そこから出発すべきだ。誰にもそういう人に伝えられない、自分で抱えるしかない重みがあるんじゃないか？　例えば恋人と、あるいは世界と向かい合ったときの孤独が。ここでは言語ゲームは関係ない。教えられないというより、むしろ決して教えるべきではない。人に教えられない秘密を一人きりで燃やすためにこそ、他者と関るべきだ。そのエネルギーを他者に対して明るく押し出すことが問題なのだ。そしてこう言わなければならない。僕は一人で、純粋に命を燃やして明るく生きる、なぜなら、他者もまた重いのを知っているから！　あるいは、僕が傷つくのは当たり前のことだ、なぜなら、他者もまた傷ついているから、と。こういう、飛躍を含んだ、誇り高い、美しいなぜならを言わなければならない。ここ

にこそ「命がけの飛躍」を置くべきだ。この知と秘密との関りは、一個の途方もない謎かもしれないが、まったくの正しい矛盾、これこそ命そのものだと思える。

こういうなぜならを言おうとしたとき、問題はまた、他ならぬ自分自身に戻ってくる。自分以外に、恋人に期待するものには、これは絶対に言えないのだ。言ったとしても嘘になってしまう。僕がかつて、いつも失敗したように。恋人に、他者に、このなぜならを言うためには、逆説的だが、自分の中からあらゆる他者を追い出して、本当に一人で、自分の命だけが燃えているところまで行かなければならない。自分の中にも他者はたくさんいるから。お前のせいだと言い出す他者、眠いと言い出す他者、恐いと言い出す他者、なんだかイラつくと言い出す他者……。彼らを自分と勘違いせず、きちんと追い出すことができなければ、明るく立つことはできない。ここでも、内なる他人に期待してはならない。僕はそうやって自分を勇気づける。これらの他者は全部、僕には一切関係ないのだと。そうしなければ、明朗な自分には絶対に手が届かない。アドルノを思い出してほしい。本当に自分ひとりであること、それだけが問題なのだ。自分ひとりで、全世界を否定してなお、同時に他者を明るくさせることができるかが。

こんな恐ろしく困難なことを言う勇気が出たのは、他ならぬニーチェのおかげだ。彼の永劫回帰のおかげなのだ。永劫回帰、つまり因果律、決定論を自覚しつつ、なお意志すること。はじめはとんでもない詭弁だと思っていた。単純に不可能か、トートロジーという意味で無意味だと。しかし違う。実際に生きていこうとするときぱったり出会う、不可避の、絶望的な矛盾に立ち向かう勇気が、そこにはあった。この問題にずっと取り付かれて来た僕には、それがはっきりわかった。これが運命ならば、晴れやかに受け取る、そしてなお意志する。そういう壮絶な、気高い勇気があるのだ。「わたしの夢は、大胆なヨット」（『ツァラトゥストラ』）。僕もヨットが大好きだ。僕も自分の運命を、晴れやかに受け取ろう。そして恋人を笑わせよう。

「受けて立つのでなければノーブレスはひらかない。それは聖なるものの大前提である。闘争において、果敢に攻めると同時に、また運命的受身、倒される側の様相がなければ、それ自体決して生きないのだ」（岡本太郎『美の呪力』）。

高揚してふと、ダブリンの空に目をうつすと、空にはカモメが、目もくれずに平然と飛んでいた。寒空にたった一羽のカモメ。彼女もまた、わけもわからない全身の重みを引き受けて、たった一人で飛んでいるのだ。僕もそうなんだ。

いま、岡本やニーチェを見ればはっきりとわかる。芸術は、自分を自由にするだけの小さなものではない。逆説的に聞こえるかもしれないが、本当は芸術ほど、単なる主観とか自我から遠いものはないのだ。本当の芸術は、自分を自由にし、相手を自由にする。もともと自分だけの自由なんか一切望まない。芸術は、それぐらい大きい。そんな大きさを目指すのだ。岡本太郎、ニーチェ、アドルノ。今度は僕が贈ろう。いつも失敗する人へ。そしていつも新しく始める人へ。つまり、すべての人へ。

やました・こうすけ（芸術・近代思想／京都大学）